

学位論文審査報告

黄 玉琴 「台湾における経済発展と設備投資行動」

学位の種類 博士（経済学）

授与年月日 1999年10月9日

〔論文内容の要旨〕

本論文は、第2次大戦後の台湾経済の経済成長において、その起動力ともいべき重要な役割を果たしてきた設備投資に関する数量的実証研究である。

本論文は4章よりなる。各章は、著者の課題「台湾における経済発展と設備投資行動」に関する論考という点で、相互に深い論理的つながりをもつが、それぞれを一つの論文とみなしうるまとまりをも備えている。

〔論文審査の結果の要旨〕

第1章「台湾の経済発展過程」は、戦後の台湾の経済発展を鳥瞰図的に描写した論述である。最初に、戦後50年間の時期区分を論じたうえで、これに従って各時期の特徴を簡潔に説明する。この部分は、台湾の小経済史ともいべき内容を持ち、それ自体は著者の独創によるものではない。しかし、この台湾経済小史は、統計的数字による的確な実証性をもつのみならず、詳細な参考文献が示されている点で、一般読者に対してもきわめて有用な小論である。

とくに、歴史的事実の抽出に関し、マクロ経済学の視点を重視し、ハロッド、ケインズらの理論に対応する統計的数字を参照している。このため、経済学者には、きわめて理解しやすい台湾経済概観となっており、以下の論述に対する優れた導入部を構成している。

第2章は、台湾における設備投資活動の資金的基礎をなす金融システムに関する研究である。台湾の金融システムは、公的金融機関が中心であるが、これとやらんで、未組織金融機関が存在するという特殊な制度的状況のもとにある。本章では、これに関する詳しい制度的歴史的説明が行われる。それとともに、二つの特色ある分析が示される。一つは、未組織金融機関が資金供給を行う金融市場では、規制が強い力を持つ公的金融市場とは対照的に、自由競争市場に近い状況が支配しているという点を問題にする。これを実証的に検討するため、著者は資金需要と資金供給の2関数と需給一致方程式からなる簡単な金融エコノメトリック・モデルを推定し、この市場では金利が需給関数のシフトに応じて、変動する事実を確認する。もう一つの分析では、国民経済計算のSNAデータを用いて、家計部門で蓄積された個人貯蓄が大幅に企業部門の設備投資資金を供給した事実を長期の時系列データにより具体的に示している。このような金融市場における一種の二重構造は、著者が台湾経済の特徴として、格別注目している点である。実際、後出の設備投資関数の推定においても、この問題に力点がおかれている。本章は、それに関する周到な準備研究の役割をも担っている一章である。

第3章は、台湾経済の産業別資本ストック時系列の推計である。本章はさらに、(1)推計した資本ストックに基づいて算出した資本係数の国際比較、および(2)台湾の資本係数時系列の趨勢的変

動を新古典派経済成長理論により解釈する実証研究も加えられている。

資本ストックの推定方法では、クズネッツを中心とする研究者によって確立され、きわめて広範囲に実際の適用が行われた基本的方法として、perpetual inventory methodが挙げられる。著者も原則的にはこれに従っている。しかし、多くの場合、ことはそれほど簡単でない。台湾の場合、官製のデータが利用可能であるが、著者が正しく批判しているように、これは著しい欠陥をもつ。そこで、著者は独自の推計を試みたのであるが、23産業部門という膨大な範囲について、統計資料の批判的利用から始まり、多数の手法の試験的適用、えられた時系列の妥当性の検討等、にいたるまで、きわめて綿密な作業経過が報告されている。この経過説明が、結局、著者が最終的に採用した方法の正当性を明示している。審査委員会では、この部分を本論文中でも出色の箇所と高く評価した。

資本ストックの推計は、経済の生産基盤の数値を確定させるものとして、それ自体でも意義は大きい。ここでは、著者は進んで、台湾、アメリカ、日本の三国の国際比較という形で、資本係数の大小を論じている。結論をあえて単純化していえば、資本係数は台湾と日本がほぼ等しく、アメリカはかなりはっきりした差でそれより高い。

時系列的動向では、台湾と日本は持続的な上昇傾向をもち、アメリカは上に凹なゆるやかな弧を描くが、上昇ないし下降の趨勢はない。著者は台湾の資本係数の長期時系列を実質賃金およびタイム・トレンドのうえに回帰させる。その結果から、台湾の資本係数は、資本係数が労働資本間の代替により上昇し、中立的技術進歩により低下するという新古典派的成長理論に従って変動したと解釈する。

第4章では、産業別設備投資関数の推計結果が報告される。投資関数の関数形は、基本的には、加速度原理に基づくストック調整型である。推定結果は良好であるとして、テスト統計量等が示される。さきの産業別資本ストックの時系列が、投資関数の推定にストック調整型を採用するため、必要となるのである。加速度原理に基づくストック調整型で基本的な方程式の現実性を確認したうえで、追加的に金融の変数の影響をテストする。この方針が方法的に着実であり、結果に対する信頼性を高めていると考える。テストされた変数のなかでは、内部資金が一番多くの産業で統計学的に良好な結果がえられた。未組織金融市場からの影響はこれと比べると若干弱かった。23という詳細な産業部門について、統一的な関数型でこれだけ安定した結果がえられたことは、成果の点でも、この研究が一つの到着点に達したものとみなしてよいであろう。

なお、本章では、投資関数の関数型についての詳細な展望が行われている。また、台湾の投資関数の実証研究の網羅的な一覧も作成されている。これらと比較しても、この研究は、全般的に、労力と時間を惜しげなく投入した、注意深く、厚みのある研究である。台湾では、23産業部門に対する投資関数の推定はほとんど例がない。これまで随所で指摘したような、種々の優れた特徴もふくめて、本論文のこの分野での学問的貢献は明白であると判断する。

この論文について弱点も指摘しておきたい。第一に、関数自体に独自性が乏しい。第二に、統計的推定法も新鮮さに欠ける。もちろん、テスト統計量についての論議は詳しく十分である。しかし、時系列分析についての、最近の発展は著しい。このような成果をとりいれた推定結果がどうなるか、は重要な検討課題である。第三に本論文の二章において、台湾における金融システムを前面に押し出した分析を行っているにも関わらず、第4章における設備投資の分析において、

金融面の取り扱い方がやや付随的である。

ただし、あえて付け加えるならば、この研究の最大の長所はバランスのとれた経済学研究という点にあると考えたい。研究の学術的な目標は設備投資行動の計量経済学的分析であるが、その目的のための最善の努力として、資本ストックを自分自身で推計し直し、また計量経済学的方法の適用も適切に行い、問題の歴史的、制度的背景は文献的に詳細に調査し、最後に統計的結果をこのような質的経済事実に照らし解釈し、評価している。一つの課題にこれだけ幅のある研究を行ったということがこの研究をきわめて魅力あるものとしている。これらすべてを勘案すれば、上記の弱点も決して本研究の価値を損なうものではない。ただ今後の研究課題として残されるべきものといえよう。

上記諸点を勘案し、審査委員会では、本論文はきわめて優秀な研究報告であり、著者黄玉琴氏に対して、経済学博士の学位授与に十分に値する業績であると考ええる。概括的にいえば、本論文の長所は、実証的データ収集の広範かつ着実なる点、計量経済学的方法の応用が適切な点、これより得られた結果に対する判断の鋭敏かつ妥当なる点、過去の関連研究を網羅し整理した展望を行っている点、その中での位置づけによってこの研究の意義と独自性を明示している点、にあると考える。

〔試験または学力確認の結果の要旨〕

なお、本論文においては、多数の外国語文献が利用されており、黄氏に対する外国語の試験は不要であると判断した。